

梅鶯仏教壮年会報

第113号
2013年
12月22日

竹灯籠の夕べ

十二月三十日(月)

夜5時半〜竹灯籠点灯
夜6時〜お勤め(正信偈)

梅鶯仏壮「親睦旅行」「報恩講」終了

十一月は、梅鶯仏壮の行事が相次いで行われました。ミュージアム鑑賞、本山飛雲閣見学、御堂演奏会拝聴、飛雲閣見学、そして夜には懇親会。夕べと盛り沢山で、二日目。朝五時半に起床して、本山の晨朝勤行に参拝し、銀閣寺・永観堂・南禅寺の紅葉狩りを行いました。充実の親睦旅行でした。「報恩講」は、本年より法輪寺と合同で厳修し、午前午後の法要・説教、夜の御伝鈔、そして懇親会と多くの会員に参加頂きました。

田中薫氏撮影



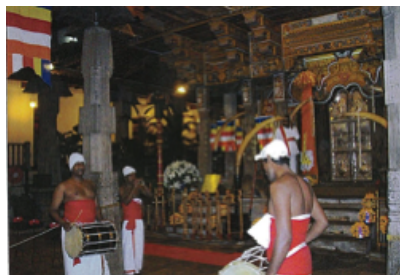
スリランカ(旧セイロン)
世界遺産の仏教遺跡を訪ねて⑦
副会長 森 勝昭

歯方から、パ・マ仏
ラガワ参拝のレ
ド見学のした。
仏滅後燃え盛る仏
陀入の炎から必死
火葬の隠して王女
に黒髪に運んでセ
が口々に隠して王
守らに運んで王女
に黒髪に運んで王
が口々に隠して王
イロに運んで王女
伝えられ運んで王
歯が祀られる陀ま
す。

毎年7月、8月
に中心として、二
週間伝統的な仏
祭り華やかな行
われていきます。
パレード前に法
間に合わせて仏
した。勿論裸足で。

仏歯寺にて
瓜生津先生ご夫妻と

数千人の踊り子(ダン
サー)が男性の大人・
子どもが主體となり
100頭以上の象が
電飾や刺しゅうで飾



仏歯寺



つた衣装を身にまとい、古典音楽
隊がドラムに合わせて街を練り歩
きます。
私たちが屋根のある指定観覧席
にて、夜8時から約1時間半のパ
レードを見学しました。
レイドを全島から集まった観客
や私たちが外人客を含めて身動き
取れないくらいで、日本からわざ
わがここのまで来て祭りを感動
祭りでした。それは壮観である
ように、25名揃
ながら、無事にホテル
に帰りました。
この期間中は、露
ルコホール内では
天やホテル内では
販売禁止また禁酒
となつています。
日本とは大違い！
10時30分ごろ
からのカレバ
キング、部屋に帰
ってから同室の方
と持ち込んだ缶ビ
ールにて一パイと。
あくまでもそと。
つづく

ペラヘラ祭り



題材法話

私たち浄土真宗の門徒にとつて、最も親しみのある「報恩講」は、親鸞聖人のひ孫に当たられ、本願寺の第三代の門主である覚如上人が、親鸞聖人の三十三回忌の法要に当たつて「報恩講式」という文書を書かれ、報恩講の意義を具體的に示すとともに、報恩講の法要の形式を整えられたものが、正式な始まりでありま

以来、浄土真宗の正式な年中行事として、今日まで連綿と続いています。

○報恩講の意義

覺如上人はその「報恩講式」の中で、親鸞聖人への報恩の心を三つにまとめられています。

一つには、親鸞聖人が生涯をかけて、お念仏のみ教えをお示し下さったこと。この私が正しく、間違いな

く救われる道はお
念仏しかないこと
を論理的に示して
下さったことです。

二つ目には、親鸞聖人はただみ教

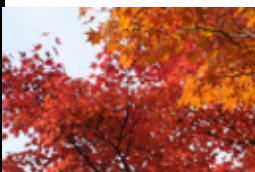


えを示すだけではなく、私達一人ひとりがお念仏の教えにより、生老病死の不安や苦しみを乗り越えて、真実の世界へと生まれさせていた。だく身の上を悦ぶ生活を送ることを願われたことです。

心としてお示し頂いていま
 たことでもあります。
 伝えてゆく「ことを願われ
 人びとに分かち合い、教え
 びを、自分の家族や縁ある
 だいた私達が、「自分の悦
 り、お念仏のみ教えをいた
 が等しく救われることであ
 とし生きるすべてのいのち
 無阿弥陀仏の願いは、生き
 そして三つ目は、この南

○今年の漢字「輪」
毎年、日本漢字能力検定協회가「今年の漢字」を選定します。
本年は「輪」という字が選ばれました。

選定理由は、東京五輪招致が決定したことや、プロ野球で優勝した楽天イーグルスのチムワークなどが



挙げられていましたが、揮毫した清水寺の森貫主は、平「来年も力を合わせて、平和な輪のつながりの世界に向けて、努力していこう」と呼びかけていました。
 実はこの「輪」という字は、仏教でも大切な字で、仏が教えを説くことを『法輪』と呼びます。

それには、車輪がどこまでも自在に転がっていくことに喩えて、お釈迦様が説いた「法」が威光をもつて人から人へと遙かに広まり、衆生の迷いを破することを意味します。

「法輪寺」も当然そこから名付けられています。

○現代社会の中で

混沌とした現代社会の中にあって、しばしば「持続可能な社会の構築」ということが提言されます。これは平たく言えば、

一社会の中で、
私たちがお互い
を認め合いなが
ら、それぞれの
いのちを大切に
仕合い、平和な
社会を築きまし



よう」といふことです。

これはまさに、覚如上人が報恩の心として示された「三つの心」に通じるもので、報恩講はまさに「持続可能な社会を築くための実践活動」といえます。

特に人間関係が希薄になりつつある現実社会を見ると、覚如上人が三つ目の心として示された「自分の悦びを、自分の家族や縁ある人びとに分かち合い、教え、伝えてゆく」ことの重要性が感じられます。

親鸞聖人は同行に宛てられた手紙の中で、「世のなか安穩なれ、仏法ひろまれとおぼしめす」とお書きになつておられます。

それは車輪がどこまでも自在に転がるように、お念仏のみ教えが多くの人に伝えられ、安穩な世の中になることを願われてのことでしょう。

今年もこうして報恩講を迎えさせて頂きました。ともに悦び合う行事となりますことを願っております。